

大理石の風呂を訪ねて

皆川 勝美

弊社、創立75周年を迎える昭和63年の春、その記念社誌を作成しようと資料やら写真等を整理中、「袋田温泉1000尺、湧出量3000石、昭和11年3月」と書かれた古い写真を見つけた。袋田とは何県にある旨を社長に尋ねた。「茨城に有って確か大理石の浴槽がある温泉だ。」とのこと、大理石の風呂とは魅力があり、昔に掘った井戸が健在とは是非、足を伸ばしてみたくなり、全国の宿一覧から電話番号を知り、それらしき所に電話する。「大理石の風呂がある宿はそちらですか？」の問いに袋田温泉ホテルが「はい、そうです。」と答え、確認のため掘った業者を問うと、秋田の伊藤鉄工所（伊藤ボーリングの前身）であるとの事。これは間違いない。社長も昔の事である故、井戸がある事と大理石しか知らない筈、誘って茨城の袋田町まで出かける事にした。しかし、ゴールデンウィークを控えており、電車の確保がむずかしかった。仕事の合間を縫っての行動は、梅雨の最中の7月の事であった。

奥羽本線から田沢湖へ、盛岡から新幹線へと乗り継いで郡山。そこから乗り換えて水郡線なのだが、この待ち時間が2時間もあった。朝8時に出て、水郡線に乗ったころはすでに3時、このディーゼル車は高校

生でいっぱいであった。少々疲れ気味の感がしたので、何とか座りたく、席を物色し窓際を2つ見つける。各駅停車なので蒸し暑い。車中に涼しい風が窓から入ってきて良ろしい気分になると停車する。こんな繰り返しの中で小さな駅舎の傍らに咲いていた紫陽花がきれいだった。

袋田の駅に着いたのは、梅雨独特の低い雨雲の垂れ込めた夕暮れであった。普段、物静かな社長も「おい、腹減ったなあ」とつぶやく時間でもあった。

改札口を出ると黒塗りのそして古いタクシーが一台予約でもしたかのように待っていた。「袋田温泉ホテルへ」と告げ、車中の人となった。

宿へ着き投宿者カードへ記入しているのを見ていたフロントマンが電話をしはじめた。すると早速、支配人と名乗る方が足早にこちらに近づいて来られ、「伊藤さんでございますね」と名刺を差し出す。社長と小生も名刺を交換の後、ここに来た顛末等を話す。

ここのお湯はその昔、田毎の湯と称して少し暖かい湯を見つけた百姓達が野良仕事の帰りに使っていた。これを当時、茨城交通の社長をしていた竹内勇之助（東大法卒）が掘ってみたいと、秋田鉦専を出て日

大の教授をしていた安藤さんに相談する。そこで伊藤ボーリングが紹介され、掘さくの運びとなったということで何故、弊社が茨城まで交通の発達していないその時にと
思っていた謎が、やっと解決された。

掘さく中、数多くの困難にぶつかり、お湯の出る気配もない、中止する事ばかり考えていた竹内さんでしたが奥方に励まされながら成功にこぎ着けたとの事を知らされる。話はそこで中断されたが、そのころ発行した小冊子をひもとき始め、また話がつづいた。小生の腹の虫が泣き始めた。疲れと空腹で早く大理石風呂に入って一杯やりたい気持ちが大きく動揺して来た。

タイミング良く、食事の仕度が出来たとの連絡、渡りに船とばかり社長の袖を引っぱりそこで話を止めさせ、憧れの大理石へと急ぐ。その風呂は旧館に有った。その前には小生が見つけた写真と同じものが掲げられており感激を新にする。戸を開けてがっかり。小さな風呂であった。あんなに夢にまで見た大理石、夢がどんどん遠のいていってしまった。

気持ちを押えながら社長と地酒とやらを汲み交しながらお互いに、大理石風呂の話は触れず「酒はやっぱり秋田がいいなあ」と宿の真下を流れるせせらぎを肴に一夜を過ごしたのであった。

翌朝、記念にと風呂場の前の写真と一緒に一枚とる事にした。その時、夕べは暗くて見えなかった大浴場の標示があり、その戸を開けてびっくり。それは大きな大きな大理石の浴槽がでーんと鎮座しているでは

ないか。思わず胸の高鳴りを覚える。「社長すごい!!」、しかし出発の時間が迫っており、残念ながら一風呂浴びる事が出来なかった。

それを教えて呉れなかった支配人を責める事も出来ず、確認しなかった自分自身がただただ不甲斐なく思えた。名物というコンニャクを支配人からお土産に持たされ、がっかりとびっくりの交差する思いをカバンに入れ帰路についた。途中、タクシーの運転手より日本一の滝があると紹介され、電車の時間が迫っているにもかかわらず、運転手が間に合わせるとの事で、袋田の滝を見せてもらうことにした。

流石にすばらしい。過年度に実施された全国名瀑コンクール第1位に相応しい。数分眺めて、お土産のコンニャクと一緒に車中の揺れる人となった。

来る時と同じように雨雲がまだ低く垂れ込めていた。



伊藤ボーリング